

## 「戦後六十年」

川並 順吾

被爆われ  
古希を迎へし現身の  
父に捧げむ嗚呼鎮魂歌

小生が十一才の誕生日を迎えたばかりの、あの暑い夏の八月九日長崎にて被爆した。昭和十九年、父は海軍に徴兵召集され長崎三菱造船技師に転属した。昭和十八年小学校四年生進級を前に実母は結核で三月に死亡し、戦争も厳しくなり、小生も未だ幼いという理由で、父はある人の奨めで再婚した。当初私は、熊本付属小学校に継母の姉の所に預けられ通学していた。

父と継母は昭和十九年に長崎に住居を移していたが熊本でも戦火は激しく、小生は父と一緒に住みたく昭和二十年三月長崎の稲佐に行き、四月私は旭国民学校五年生に転校した。学校の授業は殆んど無くて、食料は時々配給される少しの穀物類或いは唐芋の芋等それは未だ良い方で食料は日増しに悪く、部屋で過ごす時間は稀で防空壕での暮らしだった。七月下旬頃、壕から住居の二階に上って気色悪い予感のするできごとがあった。何と二階の瓦が割れ石塔が畳の真ん中に立っていた。近くの墓地に落とされた爆弾の爆風で飛ばされたのだろう。父にその事を話すと、戦争はひどくなるから福岡の田舎（菱野）の父の実家に小生を疎開させようとしていた矢先、運命を左右する昭和二十年八月九日米兵は原子爆弾を投下した。その日も照りつける強い日射しと茹だるような暑さで十一時少し前、同級生が数人泳ぎに行こうと誘いに来た。いつも空腹だったので、友人に何か食べて後で行くからと云って家の中に戻り非常用の炒り豆を食べていた。その瞬間、突然烈しい警報とただならぬ爆音と同時に閃光を浴び危機感の中、小生の身体は宙に吸い上げられ又地面に強く叩きつけられたような大きな衝撃に意識は朦朧として何が起こったのか、どれ位時間が経ったのかも分からず、悲痛に泣き 叫び 助けて！助けてくれ！と声にならない声を聞き小生は我に還った。酷い痛みと上から押えられ家の下敷きになり、潰れた家の梁の一部は肩から足にかかり瓦等に覆い被さっていた。それ等を渾身の力で掃い除けやっとな半身をのり出してみるとまるで地獄絵図としかいいようのない、一面土煙。火の海で小生は、手足に怪我はしていたが、奇跡的に助かった。必死で防空壕に逃げ込んだが、そこには皮膚は焼け爛れ、肉とも骨ともつかぬものが見え、血が吹き出ている人、人間とは思えぬ形相で恐ろしく呻く人、既に死んでいる人、治療することさえ出来ず食糧も無く、夜になり、マッチの灯さえなく、防空壕の中で次々に死んでいく。小生は怯えながら父の帰りをただ

ひたすら待った。

夜更け、何時か分からないが、父は爆心地の浦上から何処で拾ったのか濡らしたマントで焼き爛れた身体を包むようにして這うように防空壕に辿り着き、私の顔を見るなり力尽きたようにたおれ言葉はないまま目も開くことなく意識不明のまま一週間目息を引きとった。三七歳だった。小生は込み上げる悲しさ悔しさで涙さえ出さず柱屑を拾って父を荼毘に伏した。人間の屍は簡単に燃える物ではなかった。その間にも又米兵が酷い爆弾を落とす、日本人を見ると殺すと云う噂は流れ、僅かな骨を拾って瓶にいれ食べ物を探しに壊れた家の台所と覚しき所を歩き彷徨って行った。ある農家の庭先で見知らぬ女性から敗戦の事実を知った。八月も終わろうとしていた。

宇宙に行った飛行士は宙から見る地球の素晴らしさを伝えるが、今又イラク攻撃に心が痛み人は核をつくり戦争をはじめる。生命の尊さと世界人類恒久の平和、日本国9条の理念を大切に愚かな戦争を繰り返してはならないと叫ぶ。